

## 六 慾知顔の慾知らず

度偉いお金の好きな人がありました。勿論誰しも嫌ではありませんまいが。此の男は殊の外の偉物であつたさうです。衣食住は非常に儉約し、萬事に事を缺き、義理をかき、耻をかき、時には引掻きまでして、一生懸命にためたお金。人の知らぬ處に納めては、毎日こつそりと勘定して、段々多くなるのを見ては、ホク／＼者でした。或日全體の大勘定をしてみやうと、一人二階の座敷に昇り、人に來られては大變、見付かつたら百年目と、梯子段を脱して置いた。もうこれで大丈夫、誰も來はせぬ。例の金箱を開いて、床の上から座敷中に、一枚一枚お貨幣を列べて、後すざりする。恰度書物の虫干をするやうにして、何枚々と數へつ列べつ、八疊の間一杯になつて、身は梯子段のあつた上口の處まですざつて居る。唯もう嬉しくてたまらない。もつと列べやう、も少しとすざつた途端、どつさりと上口の處から、階下の板間に落ち込んで、グウとばかり死んで仕舞つたと云ふ話がある。これは固より格別の馬鹿者の一例でせうが、金にばかり目がくれて慾惚にぼけると、とてもない失態を演ぜねばならぬのみならず、大切な命を捨てることになる。大活現成して、目のつけどころを過つてはならぬ。

「慾深き人の心と降る雪は、積るにつけて道を忘るゝ」とや。餘り慾に懲ると、慾呆けに呆けて飛んだ失敗をする。一文儲けの百失ひでは困る。「御威光で三千世界手に入らば、極樂淨土我に賜はれ」。豊公の威徳で三千世界が手に入つたとて、自分は極樂淨土一つさへ賜はれば結構だといふ、曾呂利は面白いでないか。

或田舎廻りの絹商人が、日暮方通りかゝりの安宿に泊つた。一室に落付いて主人を呼び「私は少し大金を持つて居る。どうか明朝まで預かつて呉れない

いか」と、二千圓包を出して渡した。「確かにお預かり申します」と下つて来た主人。何を思つたかホク／＼顔で、料理にとりかゝり、晚餐から朝飯まですつかり茗荷一色。給仕をする女房も異つた料理と思ひ、客も偉い茗荷所ぢやな位に思つて、何も云はずに残らず食べて了つた。主人は獨り喜んで、あれ程の茗荷には少し位効験がありさうなものと、翌朝になれば客は出立の用意をし、臺所へ来て「イヤ御厄介でした」と挨拶し、金の話はせずそこの地理を尋ねて居る。亭主は茗荷の效能ヤレ辱けなやと、ホク／＼する處で「どうぞ昨夜の預け物を」と云はれて、ギツクリ此は仕舞つたとは思ひ乍らも、仕方はない。不承無精金を渡すと、絹商人は「左様なら」と表へ出て行つた。後で女房が堪りかね、「貴郎と云ふ貴郎は一體何をなさるのです。昨夜から今朝へかけて茗荷ばかり……」と聲荒らげれば、亭主は當が外れて落膽したのか、手を拱いで小首傾げ乍ら溜息ついて、「彼男は餘程茗荷に強いと見える。茗荷を食べた人は、心が呆けて物忘れをすると云ふのに、あれ程食べさしても一向效能がない。あんな事ならいつそ、飯の中へも茶の中へも入れて置けば好かつたに」「好かつたにも何もあつたものか。あんな事をして最早客はありませんが」「茗荷で二千圓すつかり忘れて行つたら、宿屋なんかせぬでも好いでないか」「でもそれが出来ないではありませんか」「そこがさ、茗荷に強い男と見えるぢやて。併し何ぞ忘れたものはないか……オ、忘れた忘れた。茗荷は大層利いたよ。彼男は大切なものを忘れて行つたでないか」「何をかいな」「何をだつて。宿錢を拂ふのを忘れたよ」「まあ何と云ふ」「オつと此方も忘れたく。宿錢を貰ふことを」「大分茗荷の御相伴をせられたと見えます」。

貰はれもせぬ人の包に目をくると、貰ふ筈の宿錢まで貰はれぬ事になる。

持もつても行いかれぬ此世このよの事ことに頓着とんちやくして、大切たいせつな未来みらいを取り外はづしては、笑わらつた  
人ひとに笑わらはれるぞ。人生じんせいか宗教しうけうか、宗教しうけうか人生じんせいか。信仰しんかうか生活せいくわつか、生活せいくわつか信仰しんかう  
か。須すべからく問題もんだいの着眼点ちやくがんてんを失うしなつてはならぬ。

夢ゆめの世よを永ながい未来みらいと思おもひかへ、慾知顔よくしりがほの慾知よくしらぬ哉かな